

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3090100581		
法人名	株式会社 松鶴		
事業所名(ユニット名)	松鶴野崎貳番館(GH1)		
所在地	和歌山市狐島590		
自己評価作成日	平成31年1月30日	評価結果市町村受理日	令和元年5月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/30/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=3090100581-00&amp;PrefCd=30&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/30/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=3090100581-00&amp;PrefCd=30&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 和歌山県社会福祉協議会		
所在地	和歌山県和歌山市手平二丁目1-2		
訪問調査日	平成31年2月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の家族から入所させて良かったと思われるサービス提供を心がけている。</li> <li>・日常生活の中で、三大介護を優先しつつ残存機能を活かせるように支援を行っている。</li> <li>・利用者 と接する時間を長くするために業務の明確な分担化を実施している。</li> </ul>
---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>2年前から掃除や洗濯をする職員と、食事・入浴・排せつなど介護する職員に分けて業務の分担化を行うことで、入居者のペースに合わせて支援が出来るようになってきている。職員は入居者の話に傾聴することを心掛け、本人が昔してきた背景を知り、入居者が不穏な時は落ち着いて貰えるように声かけをしている。また、以前は歩いて散歩する人もいたが、今は入居者の介護度が上がっているので、車椅子でも歩ける所は歩いてもらい、自分の出来る事はしてもらうようにしている。入居者に家族のように何でも言ってもらい、心を開いてもらうように職員は1対1の気持で接している。</p>
---

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「地域に密着し、家族のように接し、明るく楽しく心のこもった介護をします」という理念を管理者と職員全員が共有し利用者に限らず地域の方々と連携し高齢者の生活支援のお手伝いができるように心がけている。	地元の入居者が多く、理念の趣旨の一つとして、地域との連携には特に気を付けている。職員は、ミーティングで入居者の様子を申し送りして、入居者の想いを出来るだけ実現出来るように実践している。入居者には家にいる様に過ごしてもらい、職員は家族のように接して、家族が安心出来る様に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	1/4近隣神社に初詣 5/23ハーモニカ演奏会(ボランティア) 6/24落語会 7/21松鶴式番館夏祭り 9/13野崎幼稚園交流会 11/22すみれの会(ボランティア)民謡踊り	地域の自治会の会計をしており、配りものもホームで仕分けている。半年に一度地域の溝掃除に職員が参加している。玄関に飾ってある入居者が作った飾りを近所の人が見に来てくれるようになり、近所からの介護についての相談も受けるようになった。相談は直ぐに包括支援センターに渡すのではなく、ホームで出来る事はしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	居宅支援センターや訪問介護事業所などと連携し地域で見守っている方の対応相談などを積極的に受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の時に、館内の見学をしていただき、ホール内や利用者の方の様子を見てもらっている。会議では、行事や研修の報告を行い、参加者の方の意見等を頂き、サービス向上につなげている。	参加者には議事録を送っている。地域の方の参加を自治会を通じて呼びかけているが、参加は難しいようである。意見交換の会議のテーマは特に決めていないが、以前「室内の臭い」について意見が出た時には原因を究明して工夫して解決している。	運営推進会議へは地域の方、入居者、他の家族にも参加してもらい、会議が更に活発になる様に今後期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	主に、運営推進会議の時に包括支援センターの担当者に現場の実情を伝え、時には、第三者の立場からの意見を頂き協力を仰いでいる。生活支援課のケースワーカーが定期的に面会に来られている。介護保険課の調査員が認定調査に来られる。	包括支援センターとの協力体制を作っている。身寄りのない方や生活に困る方なども市役所の生活支援課等と相談・連携を密にしており、担当者もホームに来所してくれる関係である。何か相談事が有れば、こちらから出向くようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関前の通路はスロープになっていて接している道路は非常に交通量が多いので職員の付添いなしでは外出ができないように対策をしている。 利用者の方が話していることをできるだけ先に聞いて言動を妨げるような声掛けにならないように意識している。 松鶴の身体拘束指針を職員全員に回覧し職員会議でも具体的に説明を行った。その後身体拘束についてのアンケートを行いアンケート結果から身体拘束について知識を深められるようなテキストの作成を検討している。	拘束の外部研修に行き、その後内部の伝達研修を行っている。スピーチロックについては「何故待ってもらえるのか」を入居者に分かるように説明している。問題があった職員については、その場で注意しないようにしている。また、外出を希望する入居者には話や気持ちをお聞きしたり、一階にある裏庭に降りたり、一階の事務所の方の顔を見て「大丈夫だよ」と声をかけてもらうなど、気分転換の工夫を心がけている。夜間は対応出来る様にドアのチャイムが鳴るようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設外研修に参加した職員が、施設内研修会を開催し虐待防止に取り組んでいる。 何か課題があれば人権保護委員会を中心に検討する場を設ける事ができる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度も研修に参加したり、勉強会を通して学ぶ機会を作るように検討中。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご家族の方等に分かりやすく説明し、不安な部分や疑問点についても、理解・納得をもらえるよう説明している。改定の場合は分かりやすく書面で説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の来館時には積極的にコミュニケーションをとるために利用者の日頃の生活状況の説明を行い家族から意見や希望を聞かせてもらうのではなくこちらから話しやすい雰囲気を作って聞き出せるような気配りを行っている。意見や要望があった場合は必ず何らかの回答を行うようにしている。	地元の入居者が多く、面会に来られる家族は多い。家族へ、入居者の普段の様子を伝えているが、家族からの意見は少ない。入居者の食事の好みを伝えることで、食事の持ち込みはしてもらうなど次の来所につながるような声掛けもしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	半年に一度全職員面談を実施し、運営に関する職員の意見や提案を収集できるように対応をしている。その面談で提案があれば必ず何らかの回答をしている。提案や疑問点があれば職員会議の事前に議題としてあげてもらい、職員会議で検討を行う。 職員が働きやすい職場環境を作ることを心掛けている。	3年勤めた職員は介護福祉士の奨学金制度が受けられ、ここを辞めても、良い職員と言われるように送り出している。事業所としてこうしなさいとは言わずに、職員個々の自主性を大切にしている。会議や面談では、職員から管理者への意見が出しやすい雰囲気であり、退職・離職は少なく、シフトもお互いに譲り合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	利用者数や職員数の安定化などを図り、収支のバランスを安定させ給与及び賞与水準の維持向上を常に実践している。現場と管理者との風通しを良くするために職員と定期的な面談を実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修の実施や法人内の別事業所との職員交流を実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業他社のイベントへのスタッフとしての参加や関係事業所のイベントに積極的に参加し様々な情報収集や提供を行いサービスの質の向上に取り組んでいる。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初回面接時やアセスメント実施時にご家族からと可能であれば利用者本人からも情報収集を行い、安心してサービスを利用してもらえるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初回面接時やアセスメント実施時に家族の方等利用者の方の一番身近な方の話を聞き、その方に安心感をもっていただけるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	生活環境が大きく変わるので最初はメンタルケア的な関わりを大切に、家族の方等や可能であれば利用者の話を聞き、必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々のかかわり等の中で利用者の方の残存機能を理解し、少しでも長い間苦しい思いをせずに機能維持ができるような生活援助に努めている。 日頃のコミュニケーションの中で、ご利用者のニーズを見つけ出し安心して生活を送れるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族のコミュニケーションが少ない利用者には職員が間に入ってコミュニケーションがとりやすくなるようにイベントの告知や定期的な利用者の健康状態や日頃の様子を報告をするようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅への外出や外泊が可能な方は、家族の方等と連携しながら進めている。	外出の機会は家族の協力を十分に得て、通院後に地元で家族と食事に行ったり海へドライブに行くこともある。また、ホームと社会資源との関係を活かし、訪問カットを2ヶ月に1回利用している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホールで洗濯物たたみやおやつ作り、レクリエーションなど、利用者同士がかかわれるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族から介護関連の相談があれば必要に応じて支援に努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメント実施時や日常のかかわりの中から、利用者のニーズをある程度把握している。困難な場合は、家族のインタビューやケース会議等で可能な限り利用者本位に検討している。	個人の記録、申し送りノート、業務日誌等を参考に職員で協議しアセスメントを行っている。入居者の担当者制を取っており、カンファレンスの前にサービス担当者に用紙を渡し書いてもらい、また他の職員にも話を聞いている。何か問題があれば理由を探って解決する様にしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初回アセスメント実施時に、家族等や可能ならば利用者にお伺いしたり、日常のかかわりの中から把握するように努めている。家族や知人が来館時等に新たな利用者の情報を得るようにコミュニケーションをとるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録、業務日誌で、現状の把握に努めるとともに、ケース会議等で利用者の状況を共有化している。利用者の残存機能の把握や維持に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者個々のケース会議を開き、利用者、家族、職員の意見やアイデアを反映し、現状に合った介護計画が作成できるようにと努めている。	食事の形態が変わると計画も変えている。6ヶ月に1回、または様子が変わると見直ししている。車椅子が必要な時には前もって計画に入れている。最近、ホーム独自のアセスメントシートを全職員で共有し、2週間ごとにチェック出来る体制をつくることで評価しやすくしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常の業務中に気づいた事や注意点などを、個人記録に記入し、各利用者の計画書と一緒に、職員間で共通認識できるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	既存のサービスにないニーズが利用者、家族等より寄せられたときは、共同生活介護の定義に沿った判断を行い可能な限り柔軟に対応できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々の協力によって民謡の踊りや落語会などを開催してもらい楽しみのある暮らしができるように支援してもらっている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診時には、職員から家族等に利用者の心身状態等を情報提供し、主治医に伝えてもらえるように努めている。 訪問診療を受けている方については、随時、施設より直接医師に書面にて情報提供を行っている。	急変時は協力医の方の対応が速い。かかりつけ医を希望する方には対応している。通院は家族または職員が付き添っている。家族が付き添う時は書面で医師に伝え、家族から話を聞いて情報共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の健康チェック時に、バイタルチェックを中心に健康相談に乗ってくれている。必要に応じて利用者の受診に付添ってもらったり個々の心身状態等を書面にて情報提供し連携が図れるように努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、医療機関にサマリーなど提供を行い必要に応じてカンファレンスに参加している。定期的に医療機関と入院中の利用者の状態や新しい利用者の情報などの提供を受ける会議を開催している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	まず入所時に家族にターミナルケアについての説明を行い理解していただいている。利用者の状態を主治医と共に見極め主治医・家族・施設の3者で看取りについての話し合いを行い3者がその結果を共有している。	入居時から、家族もともにここで看取りたいと思う気持ちを大切に、指針を作っている。施設の看護師、主治医、職員とでチームで取り組んでいる。状況に応じて病院に相談し、職員は看とりの内部研修を受けている。看護師からの申し送り用紙は貼りだして、職員が周知している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応規定を明確に決めている。ターミナル期の利用者がある場合は明確な対応指示を職員が理解している。応急手当などは消防などが行う研修に積極的に参加し社内展開を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的防火訓練を行うように心がけている。運営推進会議にて、定期的に避難経路や訓練など共有し、話し合いを持っている。	訓練は年2回、消防のDVDを見たり、昼間想定の火災訓練を職員で行っている。備蓄は約3日分の水と食料を3階に置き、非常時の連絡網は事務所に掲示している。	昨年の台風時には24時間停電になり、新たな問題点も出てきたため、引き続き防災に向けて取組まれるように今後期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者を必ず「さん」付で呼ぶように徹底し、利用者と目線を合わせてから声掛けをするように心がけている。	入浴やトイレは、そっと声かけし、なるべく同性で介助している。接遇の外部研修に行き、内部で伝達研修を行うことで、全職員で共有している。新人職員には入居者が同じ事を言っても年長者としての尊厳を大切に優しく接する様に伝えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の思いや希望を傾聴し、可能なことは希望に添えるように努めている。可能な方には、自己決定してもらえるようにも働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人ひとりのペースで過ごしてもらえるように心がけてはいるが、共同生活の場合なので、希望に添えないところが多いが職員の業務の都合で利用者に合わせてもらう事はしないように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	受診時など外出時には衣服や頭髪などが整っているように心がけている。施設内では整髪や髭剃りの声掛けや自力では難しい利用者の方には、介助を行っている。衣類については、不足しているものなどは家族に連絡をして対応をしていただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	以前は食事の準備や片づけを行っていたが現在は一部の利用者が誕生会などのケーキを作る程度になっている。	刻み食、とろみ食の方が多く、入居者の苦手な物があると変えている。食事の際は、職員は入居者の安全を考えて見守りに徹している。時には裏庭で食事する事もある。また、食品センターのカレーの日にカレーバイキングを行い、入居者には好評を得ている。夏祭りの模擬店では好きな物を食べてもらうようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日、食事摂取と水分量をチェックし、摂取量に大きな過不足無く食べて頂くように配慮している。毎月、体重測定を行い、大きな増減がない事をチェックしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛けや自力では難しい利用者の方には、介助を行い対応している。口腔内に残さ物がない事のチェックを行っている。入れ歯を使用されている方については、入れ歯の破損等がないかをチェックをおこなっている。必要に応じて歯科往診の口腔ケアを依頼している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を利用して利用者の個々の排泄パターンを把握し、トイレへの声掛けや誘導を行い、トイレでの排泄が継続できるように努めている。	トイレまで車椅子での介助が必要な方は半数以上いるが、トイレの手前で手引きをするべく自分の力で行くようにしている。夜間も起きてきたらトイレ誘導をしている。便秘の入居者にはマッサージや運動してもらっている。尿量の多い人は少し早い目に誘導するなど個々に対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	通常は個々の運動機能レベルに応じた運動（歩行運動、立ち上がり運動、自転車こぎ運動など）を勧めたり、便秘の度合いによって牛乳を使ったデザートやヨーグルトをおやつ時提供している。便秘が長期間（三日以上）になる場合は主治医に相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には、入浴日や時間帯の予定を決めているが、個々の状況に応じて予定の変更を行っている。入浴時は、可能な限り個々のペースで入浴してもらい、洗身等は残存機能を活用出来るように支援している。	週2回、午後に入浴している。拒否される方は3回ぐらい声かけして、ダメなら次の日に入居者のペースで入ってもらおうようにしている。リフトが無いので、2人がかりで介助して入浴している。入浴剤を入れて季節感を楽しむなど工夫を続けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	共同生活のルール範囲内で利用者個々の生活リズムに応じて、必要な方には午睡等を行ってもらい、休息してもらえるように配慮している。夜間も個々のリズムに合った睡眠をとってもらうように入眠の声掛けや居室への誘導を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情をファイルし、服薬の目的や副作用、用法や用量についての理解に努めている。受診時や往診時に主治医に症状の変化等を伝え服薬の効果や副作用についての情報を共有している。服薬忘れや誤薬を防止するために、投薬時に薬袋の名前と朝・昼・夕の確認を二人のスタッフで声掛けし合い、チェックしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の状況に応じて外出が可能な方は職員と外出を兼ねて嗜好品等の購入を行い外出が難しい方は家族に購入をお願いするようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や気候によって不定期だが近隣への外出や買い物など職員同伴で行っている。また、家族にご協力いただける方は散髪や買い物などで外出してもらっている。	車椅子の入居者が多く、1階の中庭に時々行ったり、花見や、ドライブは計画を立てて行っている。個別の買い物や、向かいに有るコンビニなどにあらかじめ予定を立てて行っている。病院の帰りに家族と食事に行く入居者もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の残存機能に応じて、家族にも協力いただき外出時などに、自己にて支払ってもらうように心がけている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に連絡することの了解をいただいた利用者には家族の方等に電話を掛けたいとの希望があれば、電話でお話をしてもらえるようにに対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の方が季節感や開催された行事ごとの思い出を感じながら過ごせるように、行事の飾りつけを職員とともに作成したり開催された行事の写真などをホール等に飾っている。利用者によって作成された季節の飾りつけは外来の方や施設の外からも見て頂けるところに飾っている。	グループホームは建物の3階にあって窓は大きく明るく、壁のテレビを見る時は見やすい位置に移動している。壁には入居者の塗り絵作品などが飾っており、入居者と職員と一緒に歌える様に、童謡の歌詞も壁に貼っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の状況から意思を推察し、一人で行きたいときには、居室で過ごしてもらっている。気の合った利用者同士でホールのテーブルで話をされたり塗り絵やゲームなどを楽しませている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものや好みのものを居室に持ってきて頂き自宅と変わらないような環境で、居心地よく過ごせるように配慮している。	入り口のネームプレートは家族又は職員の手作りで、居室には写真など自分の好きな物や家具を置いている。ベッドはレンタルなので、入居者の好みに合わせて利用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の居室が分からなくなる利用者もおられるので、家族と協力して表札の設置や目印になるものをドア付近に設置し、認識できるように支援している。 転倒のリスクの高い方については、居室に限るがフロアー全体にクッション性のあるマットを敷いて対応している。		